

## Dialectica et Neoaristotelismus —Whiteheadの検討(5)—

赤井清晃

### 9. ニュートン以降の神の問題(3)

(承前) さて、我々は、これまで、「神」の問題を考えるために、Whiteheadが『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*, 1933)の中で言及している「自然の法則」を取り上げたのであるが、その中で、Whiteheadとヘーゲルの関係について、より精確に言えば、Whiteheadの分類する「自然の法則」の考えによれば、ヘーゲルの立場は、「内在説」なのか「賦課説」なのか、それとも、どちらでもないのか、という問題に行き当たった。そして、すでに述べたように、Whiteheadは、『過程と実在』の中でも、『観念の冒険』の中でも、それを主題として、ヘーゲルを取り上げているわけではないので、直接的に文献に基づいて論じることは難しいと言わなければならないだろう。しかしながら、間接的になるけれども、次のように考えることは可能であると思われる。すなわち、Whiteheadが言及しているヘーゲルの立場というものは、ヘーゲルのテキストそのもの(というものが、仮にあるとしたら、という、これも仮定の上でのことであるけれども)ではなくて、Whiteheadの時代のヘーゲリアンたちの立場である、あるいは、彼らから影響を受けてWhiteheadがそれがヘーゲルの立場であると思っているものである、とすれば、これは、ある程度、文献に基づいた議論が可能であると言えるだろう。例えば、その手がかりとなるのは、『過程と実在』の序文でのWhitehead自身の次の言葉をあげることができるだろう。

Finally, though throughout the main body of the work I am in sharp disagreement with Bradley, the final outcome is after all not so greatly different. [A. N. Whitehead, *Process and Reality*, pp. xii-xiii.]

最後に、この著作の主要な部分全体にわたって、私は、ブラッドリー F. H. Bradley とは明確に意見を対立させているけれども、最終的な結末は、とどのつまりはそれほど大きく異なっていない。[平林康之訳『過程と実在 1』, p. xv.]

つまり、Whiteheadは、直接にヘーゲルのテキストではなくて、ブラッドリーのテキストに影響を受けているのであり、このことは、個別的問題についてもある程度は確認することができるであろう。実際、『過程と実在』の序文のこの箇所については、ヘーゲルとの関係で、コンリングウッドが、『自然の観念』の中で次のようなことを言っている。

Whitehead himself, though he shows no sign of having read Hegel, says in the preface to *Process and Reality* that in his ultimate views he is approximating to Bradley and the main doctrines of Absolute Idealism, though on a realistic basis(it is this that shows his ignorance of Hegel's polemic against subjectivism). [R. G. Collingwood, *The Idea of Nature*, p. 170.]

ホワイトヘッド自身は、ヘーゲル(のテキスト)を読んだことがあるという形跡がないけれども、『過程と実在』の序文で、自分は最終的な見解では、ブラッドリーと絶対的観念論の主要な教説に近似する立場である、ただし、実在論的根拠に基づいてではあるが(ヘーゲルが主観主義に対して行なう論争をホワイトヘッドが無視していることを示すのはこの点である)、と言っている。[『自然の観念』, p. 170, 拙訳]

コリングウッドのこの推測と評価が正しければ(かなりあたっているだろう),我々は,Whiteheadが、「ヘーゲル云々」と言うとき,それは,主にブラッドリーの立場を指している,と理解するべきであり,Whiteheadのヘーゲルについての発言に基づいて,Whiteheadとヘーゲルの関係について詮索するのは見当はずれなやり方であると言わなければならないかもしれない。ただし,コリングウッドは,Whiteheadが,ヘーゲルのテキストを直接読んでいないとしても,Whiteheadの思索は,哲学の伝統に連なるものになっている点を評価していることを指摘しておかなければならない。しかも,Whiteheadの場合,そのことは,先行する哲学者(例えば,この場合は,ヘーゲル)の著作を読んだ後,哲学の伝統的な問題を(知って)自分でも思索する,という順番で行なわれたのではなくて,先行する哲学者の著作を読む以前に,自らが問題とするとことを思索したのち,伝統的な問題を扱った哲学者の著作を読んだら,Whiteheadが自ら問題としていたことからは,伝統的な問題に連なるものであった,という順序なのである。このことは,Whiteheadの哲学的なセンスのよさを示しているのであるけれども,それは同時に,Whiteheadの哲学の傾向も表しているから,強味であると同時に弱味でもある。というのは,コリングウッドの見るところでは,ヘーゲルが,カントの立場を主観的観念論(主観主義)として批判し,ヘーゲル自身の立場を客観的観念論(すなわち,絶対的観念論)として区別したことの是非を,Whiteheadは問題としない,問題とする必要がないということになるからである<sup>1</sup>。閑話休題,問題は,Whitehead自身が直接読んだことが確かなものは何か,ということになるのであるが,もっとも重要であると思われるもののひとつは,アレグザンダーであろう。実際,Whiteheadは,『科学と近代世界』の中では,次のように述べている。

There has been no occasion in the text to make

<sup>1</sup>コリングウッドによるヘーゲルの「絶対的観念論」の評価については,『比較論理学研究』第8号(2010),pp.9-10を参照。

detailed reference to Lloyd Morgan's *Emergent Evolution* or to Alexander's *Space, Time and Deity*. It will be obvious to readers that I have found them very suggestive. I am especially indebted to Alexander's great work. [A. N. Whitehead, *Science and Modern World*, p. viii.]

本文中では,Lloyd Morganの*Emergent Evolution*とAlexanderの*Space, Time and Deity*に,詳細に言及する機会がなかった。両著が私にたいへん示唆を与えてくれたことは,読者には明らかだろう。特に,Alexanderの広大な著作には,負うところがある。[『科学と近代世界』,序文,拙訳]

これは,『科学と近代世界』の序文での言及であるが,『過程と実在』では,モーガンはともかく,アレグザンダーについては,少なくとも2回,名前を挙げているから,これまでにも,ジャン・ヴァールやコリングウッドらによって,Whiteheadとアレグザンダーの類似点や差異について言及されてきた<sup>2</sup>。Whiteheadも言っているように,文字通り,"great (広大な)"著作(講義)である,アレグザンダーの『空間,時間と神性』は,Whiteheadに対してならずとも,当時,影響力が大きかったであろうから,無視できないのは当然であるけれども,どの点に着目すべきか,というよりも,どうしても気になるのは,ヘーゲルなのである。いや,より精確には,ヘーゲルの亡霊というべきかもしれない。というのも,先の『過程と実在』からの引用で明らかなように,Whiteheadが,ブラッドリーから影響を受けていることは明らかであるが,それと同様に,アレグザンダーも,それがどのようなものであれ,アレグザンダー自身の言及からみても,ブラッドリーから影響を受けているのであり,また,ボサンケットからの影響も考えられる<sup>3</sup>。もちろん,アレグザンダーが,他から受けた影響(例えば,先に名前のあがったL.モーガンから"emergent"という語を借りていることなど)は,これらヘーゲリアンからだけでないのは明らかであるが,しかし,ブラッドリーやボサンケットからの影響は看過できないで

<sup>2</sup>J. Wahl, *Vers le concret*, pp. 179-180の註2。また,R. G. Collingwood, *The Idea of Nature*, pp. 165ff.のWhiteheadのセクションを参照。

<sup>3</sup>本稿では,ボサンケットからの影響について検討できなかった。

あろう。というのも、先に、我々は、「自然の法則」についての考え方の中で、Whitehead の立場から、もしヘーゲルを位置付けるとしたら、「神」についての問題を考慮すると、「内在説」と「賦課説」の間を揺れ動くのではないかということに指摘したけれども、アレグザンダーは、『空間、時間と神性』の中で、「神」に関して述べる際に、「有神論」を「理神論」の方向で記述している箇所があり、かつ、そこで言及されるのは、アレグザンダーが言うところのヘーゲルであり、ブラッドリーなのであるからである。実際、この点に関して、アレグザンダー自身は、註の中で、次のようにことわっている。

In the following pages I am giving theism a twist in the direction of deism, or rather I am neglecting the distinction between the two. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 388, n. 1.]

以下のページでは、私は、有神論 (theism) を理神論 (deism) の方向へひとひねりねじって記述しようとしている、というよりむしろ、私はこれらふたつの間の区別を無視しようとしている。[『空間、時間と神性』、第2巻、p. 388、註1、拙訳]

このことは、Sorley の *Moral Values and the Idea of God* (Cambridge, 1918) を読んだことによつて、アレグザンダーは気付かされたようである。また、彼は、さらに次のようにも言っている。

Theism, it is said, means not merely transcendence but immanence. Not every form of theism can be said to assert immanence. And it is precisely the possibility of immanence along with transcendence that has to be explained (see later). [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 388, n. 1.]

有神論は、単に (神の) 超越を意味するだけではなく、内在も意味する、と言われる。(しかし) 有神論のすべての形態が内在を主張すると言われるわけではない。そして、説明されなければならないのは (後述)、まさに、超越に加えて内在の可能性なのである。[『空間、時間と神性』、第2巻、p. 388、註1、拙訳]

Whitehead の「自然の法則」との関係では、「自然の法則」を課する「神」を必要とする「賦課説」(ニュートンやデカルト) の「理神論 (deism)」がどう位置付けられるか、「(神の) 超越」とい

い、「(神の) 内在」といい、「何」から超越し、「何」に内在するのか、ということについては、暫定的に「自然」あるいは「世界」、「宇宙」から、そして、「自然」あるいは「世界」、「宇宙」に、としておかなければ議論が先へ進まない。「空間」「時間」もある意味では、「神」ということになってしまうのでは、主張する意味がほとんどないことになるであろう。そこで、やはりアレグザンダーとしても、断り書きが必要だったのであろうと思われる。続けて、彼は言っている。

If immanence means simply working in some department of creation, as in human values, this is not immanence in the natural sense which pantheism attaches to the conception, that of working in every part of creation. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, pp. 388-9, n. 1.]

もし、内在ということが、人間の価値基準の場合と同じように、単に、創造のある部門で作用することを意味するならば、これは、汎神論がこの概念に付与している本来の意味での内在、つまり、創造のあらゆる部分で作用するという概念、ではない。[『空間、時間と神性』、第2巻、pp. 388-9、註1、拙訳]

アレグザンダーは、有神論のうち、(神の自然への) 内在を容易に主張できるようにする「自然=神」となってしまうような汎神論でもなく、かといって、「神」は「自然」からはまったく超越しており、つまりは、外在的であり、「自然」の外から、「法則」を賦課するという「賦課説」を可能にする理神論でもない、という立場を、なんとかして模索しているように思われる。超越か内在かの二分法で、これ以外を認めない、という立場からすれば、そのような中間的、あるいは、折衷的な立場は、あり得ないはずなのであるけれども、それを可能にしてしまうとき、アレグザンダーの筆致の向こう側の近いところに、ブラッドリーが、そして、もう少し遠いところに、ヘーゲルがいる、と感じるのは間違っているだろうか。その議論を辿っていくと、次のようになる。

For theism, God is an individual being distinct from the finite beings which make up the world; whether as in the popular theistic belief he is regarded as their creator or as in the doctrine of Aristotle moves them from without as the object of

love, as a man's good sets his appetite into operation. In either case he transcends finite things. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, pp. 338-9.]

有神論にとっては、神は、世界を構成している有限な存在者からは区別された個別的な存在者である。人口に膾炙した有神論的信仰においてそうであるように、神が有限な存在者の創造主と見なされているにせよ、あるいは、アリストテレスの学説においてそうであるように、神は愛される対象として外から有限な存在者を動かす、ちょうど人間にとっての善が人間の欲求を作用させるのと同じように、そのどちらの場合も、神は有限な事物を超越している。[『空間、時間と神性』、第2巻、pp. 338-9、拙訳]

ここまでは、まず、有神論の主張のうち、「神」が最初の創造において、有限な存在者(被造物)を創造したということと、この創造論と排他的な選択肢ではないけれども、創造の有無にかかわらず、現に、神が有限な存在者を動かす原因であるということ、この二つのことをアレグザンダーは確認している。そして、どちらの場合も、「神」は、有限な事物を超越しているという。これに対して、汎神論の場合はどうであるかが、次に言及される。

For pantheism, on the contrary, God is immanent in the universe of finite things. In the more popular or easy-going form of it, which has received classical expression in the famous passage of Pope("warms in the sun, refreshes in the breeze, etc."), God is pervading presence.[S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 339.]

これに対して、汎神論にとっては、神は有限な事物からなる宇宙に内在するのである。もっとよく知られた、わかりやすい表現形式、それは教皇の有名な一節で古典的な表現(「太陽の暖かさ、そよ風の爽やかさ、等」)を受け入れているものであるが、神は広く行き渡って現在する。[『空間、時間と神性』、第2巻、p. 339、拙訳]

ここまで来ると、容易にこれはスピノザの立場を言っているのではないか、と思われるが、それはある程度その通りなのであろうが、アレグザンダーの念頭にあるのは、ヘーゲルのようである。

In the profounder forms of it, as in Spinoza, everything is a fragment or mode of God, is unreal or only relatively real apart from God, and finds its reality in God. It is not so much that God is in everything but rather(I am again quoting Hegel) that

everything is in God. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 339.]

汎神論のより深い形式においては、スピノザの場合がそうであるように、万物は神の一部あるいは様相であり、万物は実在的ではなく、すなわち、神から離れると相対的にのみ実在的である。そして、万物は神においてその実在性を見出すのである。神が万物の中にあるというよりはむしろ、(再びヘーゲルの言葉を引くのであるが)万物が神の中にある、ということである。[『空間、時間と神性』、第2巻、p. 339、拙訳]

汎神論の主張として、「神が万物の中にある」というよりもむしろ、「万物が神の中にある」というほうを採用することによって、アレグザンダーは、自説に接近すると同時に、そこにヘーゲルの名前が添えられていることが注目される。これが実際に、ヘーゲルの言葉かどうかということの検証は、今はおくことにして、その内容として、アレグザンダーが考えていることは、次のようなことである。

The Absolute in the current idealism takes the place of God in pantheistic metaphysics, while God himself becomes an appearance, and that is the reason at once why the name of pantheism is not applicable to such a system of thought and why the position of God in the system is so indefinite. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 339.]

現在広く行なわれている観念論における絶対者は、神の位置を汎神論的な形而上学のうちに置くが、その一方で、神自身は現象として現れる。そして、そういうわけで、汎神論という名称はこのような思索の体系には適用できないのであり、また、同時に、その体系のうちでの神の位置は明瞭ではないのである。[『空間、時間と神性』、第2巻、p. 339、拙訳]

ここで、アレグザンダーが指摘する「現在広く行なわれている観念論」の少なくとも一つは、ブラッドリーのそれであろうし、「神の位置付け」に関して言えば、「汎神論」ということになりそうであるけれども、しかし、「神自身は現象として現れる」という限りは、「汎神論」というわけにはいかなくなる、というのである。それは、「神自身は現象として現れる」という限りは、言外に、「現象として現れる」以前の(「以前に」といっても、時間的にではなくて原理的に)「神自身は、どこに位置づけられるのか?」という問いを誘い出してしまうからであろうか。この種の問いが許されるとしたら、アレグザン

ダーの場合も、Whitehead の場合も、それぞれ異なる仕方で、実は、この問いに対する答が用意されているのである。ところで、上述の箇所に、アレグザンダーは、註を付けているのであるが、その内容は、ブラッドリーの *Appearance and Reality* からの引用である。しかし、アレグザンダーの『空間、時間と神性』では、第1巻、第2巻を通じて、しばしば引用、言及されているためか、書名とページ数のみが記載されているだけで、本文にも、註にも、ブラッドリーの名前がない。それほどに、アレグザンダーと一体化しているような印象さえ受ける。

We may say that God is not God till he has become all in all, and that a God which is all in all is not the God of religion. God is but an aspect, and that must mean an appearance of the Absolute. (*Appearance and Reality*, p. 448.) [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 339, n. 1.]

我々は次のように言つてよいであろう。すなわち、神は、全体における全体になるまでは、神ではない。また、全体における全体である神は、宗教上の神ではない。神は、単に、様相・局面にすぎない。しかも、それは絶対者の現れを意味しなければならない。(『仮象と実在』, p. 448.) [『空間、時間と神性』, 第2巻, p. 339, 註1, 拙訳]

これは、先に指摘した、「現象として現れる」以前<sup>4</sup>の「神自身は、どこに位置づけられるのか？」という問いを誘発しないための巧妙な註である。というのも、「神は、全体における全体になるまでは、神ではない」のであるから、「現象として現れる」以前の「神自身は、どこに位置づけられるのか？」という問い自体が意味をなさないことになる。こうして、ブラッドリーを援用することによって、アレグザンダーは、「汎神論」でありながら「汎神論」ではない「有神論」の立場を提示し得たつもりかもしれない。けれども、例えば、後に、ハムリンが、絶対的観念論としての一元論としては、このブラッドリーの立場は一貫性を保てないことを指摘している<sup>5</sup>。ハムリンが着目しているのは、多である現象が、一である絶対者から、いかにして説明できるか、という問題に対して、多である現象を、完全に偽 (false) なるものとは見なさない、ブラッドリーの立場では、一元論としての一貫性がない、という点にあると思われる

<sup>4</sup>この「以前」も、時間的にではなくて、原理的に、という意味である。以下も同様。

<sup>5</sup>D. W. Hamlyn, *Metaphysics*, pp. 111ff.

ので、全く、「現象として現れる」以前の「神自身は、どこに位置づけられるのか？」という問いと同じ問題を扱っているわけではない。しかし、ハムリンの批判は、アレグザンダーの与り知らぬところであり、アレグザンダーにとっては、ブラッドリーに従って、「神は、全体における全体になるまでは、神ではない」が、「現象として現れる」ことで充分なのである。伝統的な創造論では、神が創造主であって、始めに神が天と地を造った、とされるのに対して、アレグザンダーの場合について、コリングウッドが、次のように簡潔に表現している<sup>6</sup>。

Alexander, on the contrary, says that in the end the heavens and the earth will create God. [R. G. Collingwood, *The Idea of Nature*, pp. 163-4.]

反対に、アレグザンダーは、最後に、天と地が神を造るものである、と言う。[『自然の観念』, pp. 163-4, 拙訳]

アレグザンダーにとっては、「時間-空間」において、物質的レベルから精神的レベルに至るまでのさまざまな段階の存在が、創生する (emerge)<sup>7</sup> のであって、神によって創造 (create) されるのではない。従って、「天と地が神を造る」という表現は、アレグザンダーの立場からすれば、「天と地に神が創生する (姿を現す)」となるであろうが、コリングウッドは、伝統的な創造論の「神が創造主であって、始めに神が天と地を造った」という表現を逆転させて、そのまま「創造する (create)」を使っているように思われる。その上で、さらに、彼は次のように言う。

Hence, when Alexander asks himself whether he can support the belief, common to religion and traditional cosmology, that God is the creator of the world, he replies that on the contrary he must reject it: it is space-time which is the creator and not God: and strictly speaking God is not a creator but a creature. [R. G. Collingwood, *The Idea of Nature*, p. 164.]

ここから、アレグザンダーは、神は世界の創造主であるという、宗教と伝統的な宇宙論に共通な信念を自分は支持できるかどうかを自問するとき、逆に、彼はこれを拒否せざるをえないと返答する。というのも、創造主であるのは、「時-空」であり、厳密に言えば、神は創造主で

<sup>6</sup>この点については、『比較論理学研究』第6号 (2008), pp. 7-8 を参照。

<sup>7</sup>この「創生する (emerge)」という表現については、アレグザンダーが、L. モーガンから借りたものである。

はなくて、被造物であるからである。[『自然の観念』, p. 164, 拙訳]

ここでも、「～を創造する(create)」という他動詞的表現を、「～が創生する(merge)」という自動詞的表現に置き換えて表現するならば、「被造物(creature)」は、「創生したもの=姿を現したもの(an emergent=that which has emerged)」<sup>8</sup>となり、「創造主(creator)」は、不要である。しかし、コリングウッドがそうしたように、アレグザンダーも、従来の創造論との対比を分かりやすくするためか、「被造物(creature)」という表現を用いているので、アレグザンダーの立場からすると、これを「創生したもの(an emergent)」と理解しなければならないかもしれない。それを踏まえて、アレグザンダーが、それぞれの存在のレベルの「被造物(creature)」という表現を用いて「神性(deity)」について語っている一例を見ると、

On each level of finite creatures deity is for them some 'unknown'(though not 'unexperienced') quality in front, the real nature of which is enjoyed by the creatures of the next level. [S. Alexander, *Space, Time, and Deity*, Vol. II, p. 348.]

有限な被造物の各段階で、神性は、それらの被造物にとっては、「経験されていない」わけではないけれども前方にある或る「知られざる」性質であって、その性質の現実の本性は、次の段階の被造物によって享受されるのである。[『空間、時間と神性』, 第2巻, p. 348, 拙訳]

という件があるが、ここでの「被造物」を「創生したもの=姿を現したもの」と理解する<sup>9</sup>と、物質のレベルにある「被造物」にとっては、「精神」のレベルのものは、「神性」であり、より精確には、「経験されていない」わけではないけれども、前方にある或る「知られざる」性質であって、そもそも、「神性」とも「知られざる」或る性質としか表現しようがないものなのである。さらに、「精神」のレベルある「被造物」にとっては、その次の段階にあるものが、「経験されていない」わけではないけれども、前方にある或る「知られざる」性質が、「神性」なのであ

<sup>8</sup>この「アレグザンダー自身は、「emergent」を表記のように、名詞化して用いており、「that which has emerged」は、筆者による言い換えである。

<sup>9</sup>アレグザンダーの場合、厳密には、「精神(mind)」にあてはまると思われるので、すべての存在の段階(レベル)には適用できないかもしれないが、今は理解のために暫定的にこのように解しておく。

て、これも「神性」としか言いようがないものなのである。このように、どの段階にあるものにとっても、前方にある或る「知られざる」性質として、「神性」が、まさに、現れるということになる。そして、この段階が行き着くところでは、この「神性」は、先に、アレグザンダーが引用していたブラッドリーの表現を用いるならば、「全体における全体」としての神(ただし、宗教上の神ではない)、すなわち、絶対者の現れとしての神となるのであろう。少なくとも、以上のことを考慮した上で、Whiteheadが、『過程と実在』の第5部「最終解釈」の中で、神と世界について挙げている、対照法(antithesis)による最後の摘要の7つの命題の最後のもの、すなわち、「神が世界を創造すると言うのは、世界が神を創造すると言うことと同じく真である(It is as true to say that God creates the World, as that the World creates God.)」<sup>10</sup>という命題を検討することが次の課題となるであろう。(未完)

#### 文献

Alexander, S., 1920. *Space, Time, and Deity: The Gifford Lectures at Glasgow, 1916-1918*, Vol. II, London: MacMillan.

Bradley, F. H., 1897. *Appearance and Reality*, London: Sonnenschein.

Collingwood, R. G., 1945(1978). *The Idea of Nature*, Oxford: Clarendon Press.

Hamlyn, D. W., 1984. *Metaphysics*, Cambridge: Cambridge University Press.

Wahl, J., 1932(2004). *Vers le concret*, Paris: Vrin.

Whitehead, A.N., 1925(1967). *Science and the Modern World*, New York: Free Press.

Whitehead, A.N., 1933(1967). *Adventures of Ideas*, New York: Free Press.

Whitehead, A. N., 1978. *Process and Reality*, Corrected Edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York: Free Press.

Whitehead(ホウトヘッド/種山恭子訳), 1980. 『観念の冒険』(『ラッセル, ウィトゲンシュタイン, ホワイトヘッド』世界の名著70, 中央公論社)所収。

Whitehead(A.N.ホウトヘッド/平林康之訳), 1983. 『過程と実在, コスモロジーへの試論』1, 2, みすず書房。

(あかい きよあき, 広島大学[哲学])

<sup>10</sup>A. N. Whitehead, *Process and Reality*, p. 348.